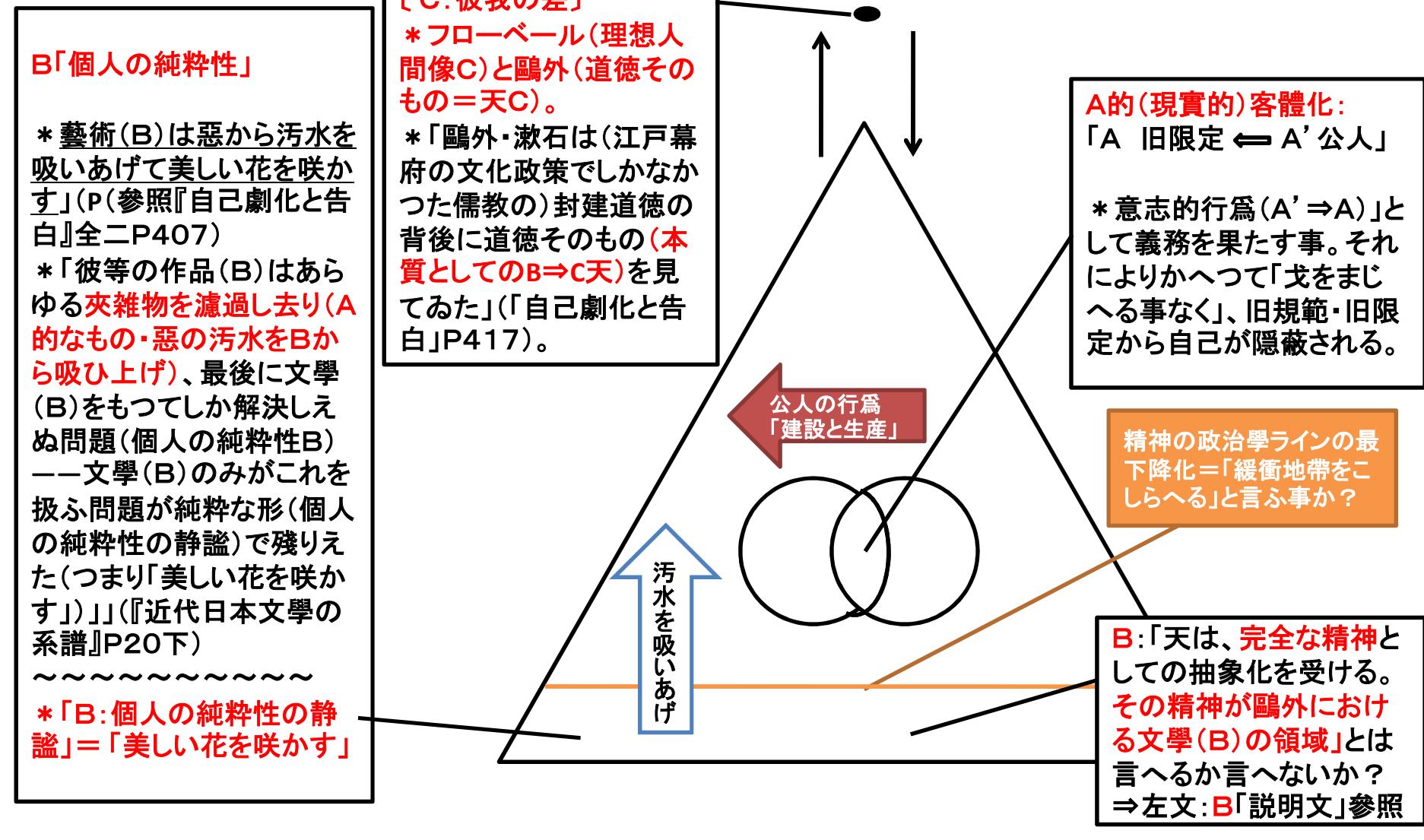


〔ヨーロッパ流文學概念（「彼我の差」圖）の鷗外的展開（以下圖）を考察する〕：「鷗外・漱石の意識してゐたものは、彼等の言説のいかんにかかはらず、要するにヨーロッパ人になることであり、ヨーロッパ精神を身につけることであり、さらにヨーロッパ流の文學概念（「彼我の差」圖）を確立しようとするにほかならなかつた」（『文學史觀の是正』P358）。

*「彼等（鷗外・漱石）がともに西歐文學の傳統を深く理解してゐたこと、この傳統のそとには自己の作家活動はもとより個性の完成すらもちえなかつたことが考へられる」（『近代日本文學の系譜』P20下）。その敷衍が以下の展開圖か？

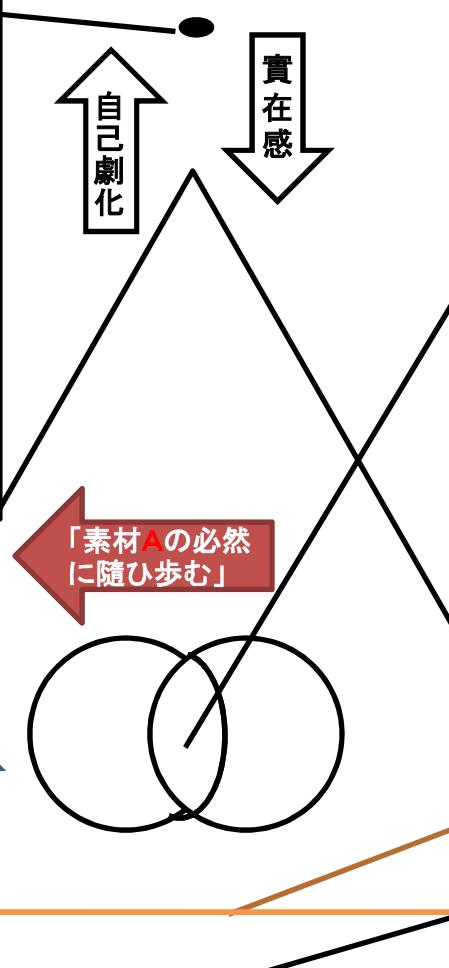


「自分の中にある、武士の気持ち(背後の道徳=C儒教道徳・武士道)と西洋文化、この二つの生き方をどうしたらいいのか。これを捨てるのか、あるいは保持していつたらいいのかといふ、鷗外の西洋化した新しい目から見たら否定しなければならないやうなもの、しかしそれにも魅力を感じて時代に叛逆しながらそれを何とか維持Bしようとしてゐる、一所懸命それに耐へてゐる(B)といふ感じ、それが『灑江抽齋』なんかにはあらはれゐる」(『福田恒存對談座談集』第四P13)

B「個人の純粹性」

「彼の歴史に対する情熱は『かのやうに』五年後に史傳といふ新しいジャンルを開発した。彼は『妥協』した(傍観者になつた)のではない。新思想(『フィクション』の哲學)の尖端を歩みながら、封建時代の傳統の重み(背後の道徳=C儒教道徳・武士道)に堪へてゐたのである」。何故なら、明治に残存する「いはゆる封建道徳」の「背後に道徳そのもの」を鷗外は見る爲に、と恒存は言ふ。自己の夢想(C:儒教道徳・武士道・天)が激しいと同時に、かつ明治に未だ残る「いはゆる封建道徳の背後に道徳そのものを鷗外は(漱石も)見てゐた。生きてゐる人生の眞實を見てゐた」。それが爲に耐へてゐたのだと。(全二P417『自己劇化と告白』)

上述の「武士の気持ち(背後の道徳=C儒教道徳・武士道・天)」…明治に未だ残る「いはゆる封建制度の背後に道徳(C)そのものを鷗外は(漱石も)見てゐた。生きてゐる人生の眞實を見てゐた」。つまり、『灑江抽齋』に「生きてゐる人生の眞實」を鷗外は見た、と言ふ事であらう。



「A 素材 A' 自己」
「ひと(A')は素材(A)以外にはたして一步でもでることができようか。ひたすら素材に忠實にたらんとするものをのみ、素材(A)は導いてゆく。素材の必然に随つて一步一歩着實に歩む以外に偶然(A')の溝を越す方法はない。そして、この必然の尖端がすなほに偶然(A')と相接(A' ⇒ A:客體化)するとき、詩が、いさかも虚構の跡をとどめない眞實の詩が光を放つ」([難解又は重要文]P513下)

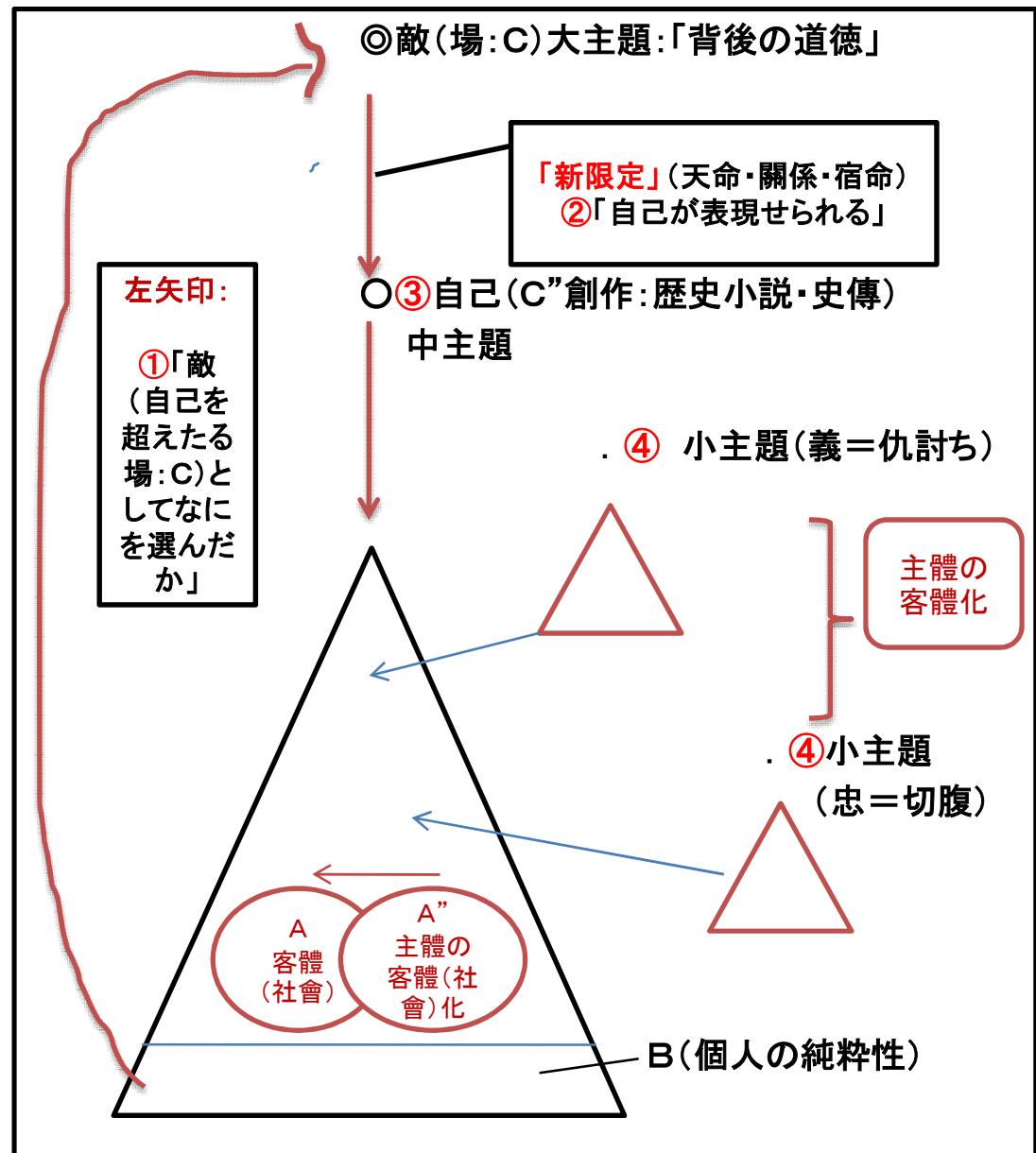
精神の政治學ライ
ンの最下降化=「緩衝地帯をこしら
へる」と言ふ事か?

B:「天は、完全な精神としての抽象化を受ける。その精神が鷗外における文學(B)の領域」とは言へるか言へないか?

「われわれが敵(自己を超えたる場:C)としてなにを選んだかによつて、そしてそれといかにたたかふ(宿命/自己劇化)かによつて、はじめて自己は表現せられる(創作対象に)のだ。・・」⇒圖解次頁

各文人別 「われわれが」	大主題 (C) の發見： 「敵 (自己を超えたる 場)」	「新限定」 (天命・關係・宿命) 「としてなにを選ん だか (宿命選擇)」に よつて」	中主題 (C”文學) の創造： 「そしてそれといかにたたか ふ (宿命/自己劇化) かによ つて、自己が表現せられる」	小主題の創作 「表現せられる (創作對象 に)」即ち「現實的客體化」
森鷗外	「背後の道徳」	天命 (儒教道徳 = 至 誠・武士道)	歴史小説・史傳	義 = 仇討 ち = 『護持院原の敵討 』 ・忠 = 切腹 = 『堺事件』 ・孝 = 『高瀬舟』 ・全般 = 『渋江抽斎』 等々
漱石	「背後の道徳」	天命	「自己本位」 (彼我の差に踏み留まる?)	小主題 (『私の個人主義』・各小 説他)
二葉亭	「國家」=Cの代はり	國命	國士として活動	洋行
ルソー	「神」	神意	『告白録』	神・C : 「思想に自己を賭けた」 描写 P 4 1 4 下
フローベール	夢想 (理想人間像)	神意	近代自我 (個人主義) 否定	『ボヴァリー夫人』他。 (神・ C・夢想「思想に自己を賭けた」 描写)。しかし、夢想は作品には 登場しない)
チエホフ	「空家 (神不在)」にたへ る	「無執着」「底意のな い眼」	近代自我 (個人主義) が自己解釈 「獨り合點」する意識 (D 3) を 「在るがままに描く」	各戯曲・小説 他
ハムレット	先王の亡靈 (C : 王權神 授)	君命 : 王權奪還「關節 を治す」	復讐	各章 : 「めまぐるしく行動しなが ら、意識の世界では (敵・新限定 から) 一歩も動かず」
恒存	絶對・全體	誠實	「關係と言ふ眞實を生かす」=フ イクション	文學評論・演劇・政治論 他

《本文9頁》:敵(自己を超えたる場C:例「天」)⇒関係・宿命(D1例:天命)⇒自己(C")の活動(例:鷗外「歴史小説」)…以下構圖の、「完成せる統一體としての人格」論(テキストP10圖)及び演劇論(テキストP11圖)との相似形に留意されたし。即ち①⇒②⇒③⇒④の流れに。



*左圖を詳細に記すと、鷗外の場合は以下の通りとなる(拙文『口邊に苦笑』参照)。

大主題(C)の發見「背後の道徳」⇒ 天命・宿命・新限定⇒中主題(C")文學:歴史小説・史傳の創作⇒小主題:客體化(義=仇討ち=『護持院原の敵討』・忠=切腹=『堺事件』・孝=『高瀬舟』・全般=『渋江抽斎』等々)の創作と言う能動となる。

*それぞれの大主題(C)の發見⇒中主題(C")文學:歴史小説の創造⇒小主題

・漱石の場合は、
大主題(C):「背後の道徳」⇒ 天命・宿命・新限定⇒中主題C"「自己本位」(彼我の差に踏み留まる?)⇒小主題(『私の個人主義』・各小説他)。

・ルソーの場合は、
大主題(C):「神」⇒ 神意・宿命・新限定⇒中主題(C")『告白録』⇒小主題(神・C:「思想に自己を賭けた」描写 P414下)

・フローベールの場合は、
大主題(C):夢想(理想人間像)⇒神意・宿命・新限定⇒中主題(C")近代自我(個人主義)否定⇒小主題(『ボヴァリー夫人』他。(神・C:夢想「思想に自己を賭けた」描写)。しかし、夢想は作品には登場しない)

・ハムレットの場合は、
大主題:先王の亡靈(C:王權神授)⇒君命・宿命・新限定(王權奪還「關節を治す」)⇒中主題(C":復讐⇒小主題(各章:「めまぐるしく行動しながら、意識の世界では(敵・新限定から)一步も動かず」)

・二葉亭の場合は、
大主題(C):「國家」⇒國命・宿命・新限定⇒中主題(C")國士として活動)⇒小主題(洋行)

・恒存の場合は、
大主題(C:絶對・全體)⇒關係・宿命・新限定(誠實)⇒中主題(C")「關係と言ふ眞實を生かす」(イクション)⇒小主題(文學評論・演劇・政治論)

・チェーホフの場合は、
大主題(C):「空家(神不在)」にたへる⇒宿命・新限定(「無執着」「底意のない眼」)⇒中主題(C")近代自我(個人主義)が自己解釈「獨り合點」する意識(D3)を「在るがままに描く」⇒小主題(各戯曲他)